慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オクシタニア中世抒情詩と詩の活用
Sub Title	Poésie des troubadours et ses utilisations/réinterprétations
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.118, (2020. 6) ,p.113 (130)- 121 (122)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2019年度藝文学会シンポジウム「詩とその活用 : 5カ国篇」 開催日: 2019年12月13日 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール・ 東館5階
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01180001-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オクシタニア中世抒情詩と詩の活用

川口　順二

まずはじめにフランス南部でもっとも知られている詩人の一人ベルナルト・デ・ヴェンタドルンの詩『ひばり』をE. オブリ女史がアカペラで歌っているのを聞いていただきます。（音楽）これはおそらく最もよく知られているオクシタニア中世抒情詩の一つだと思います。

それではまずオクシタニアという地方についてお話します。フランスの2014年の法律で南仏の一部の行政地域の一つを現在オクシタニアと呼んでいますが、それ以前は現在のフランスの南の部分がいわゆるオクシタンの地域、文化圏になります（図1）。オクシタニアのオック語はフランス語ではありません。全く関係ないとは言えませんが、むしろカタルーニャ語とかイタリア語をご存知の方の方がよく分かる言葉ではないかと思います。また文化的にも北と南は非常に異なります。この南のフランスでどのような詩が出てきたのかについてお話します。

図1　オクシタニア

11世紀の終わりにアキテーヌ公ギヨーム9世が、現存する南仏の詩でもっとも古い詩を残しました。そして南仏詩人のトルバドゥール（troubadour）であるギラウト・リキエルが、その一番最後の詩を書いたと言われています。実は14世紀に入っても少し作品はありますが、書く人はいても全体として非常に落ち目になっているということです。次にアリエノール・ダキテーヌ（1122/24?—

1204）はギヨーム９世の孫娘で、最初はフランス国王と結婚しましたが、離婚後、まもなくイギリス国王となるヘンリー２世と結婚します。その結果、南仏の非常に広大な部分がイギリスと関わる地域になり、プランタジネット帝国の最盛期を迎えます。1209 年から 1229 年まで続いたアルビ十字軍は異端のカタリ派の征伐を目的とし、20 年ほどの戦争によってかなりの部分が破壊され、独自の文化をもっていた南仏地域が最終的に北のフランス王の領域に組み入れられていくという歴史があります。

「トルバドゥール」と言いましたが、これはフランス語の読み方で、「トルバドール」というのが南仏の読み方です。オック語による作詞・作曲により、中世ヨーロッパの話し言葉、現地語である俗語での文学表現、抒情詩が成立し、ここから北フランス、スペイン、イタリア、ドイツなどに伝わって中世以降のヨーロッパの抒情詩が始まります。このトルバドールは、ギヨーム９世のような大貴族から、聖職者や都市市民、大道芸人などを含む様々な身分の人たちです。多くの写本が 13 世紀中頃もしくは末から 14 世紀にかけて作られますが、その多くは北イタリアで作られます。トルバドールの抒情詩は、例えば北フランスの叙事詩『ローランの歌』などに比べ、ごく短いものになります。日本の和歌は基本的に抒情的な印象を受けますが、オクシタニアの抒情詩に比べると和歌の方がさらに短いといえます。また一般に叙事詩は作者が知られていないものも多いですが、抒情詩は逆に作者が特定されることも多いとされます。トルバドールの叙情詩には、詩人が思いを語る恋愛詩（canso、フランス語のシャンソン）、政治や社会の諷刺詩 sirventes、故人を悼む哀悼詩 planh、思想や恋愛などについて２人が論争する partimen、恋人たちが夜明けの別れを嘆く曙の歌 alba、そして騎士が羊飼いの娘に言い寄るパストレラ pastorela、このように色々ありますが、ジャンル意識は未だに弱いと言えます。この発表では抒情詩を恋愛詩に限定してお話し致します。

一般に中世抒情詩は貴族層に向けて書かれたものと考えられ、800 ～ 900 年前に作られたものですから解釈が非常に難しいことがあります。恋愛詩はテーマが単調ですが、トルバドールの詩は修辞と作詩法（韻、形態）の技術的な部分が非常に重要とされます。逆にあまりにも形式に走って、意味解釈が現代人には極端に困難なものも存在します。例えばダンテが「煉獄編」で最も素晴らしい詩人と称揚するアルナウト・ダニエルの詩は難解さで知られます。起源を遡ると、音楽

ではリモージュにあるサン・マルスィアル修道院で発達した教会音楽が影響を与えたと考えられています。他に当時イスラム支配下にあったイベリア半島の音楽の影響もあったと言われます。詩の発生には、宗教詩、イスラムの歌詞、あるいは機織りの歌といった古くからの女性による詩が発生に関わったとして挙げられていますが、定説に至っているわけではありません。ただし、恋愛詩そのものはオクシタニア抒情詩が展開されたヨーロッパ地域の他にも生まれています。

次にトルバドゥールの詩の契機、つまり一体どうしてこういう詩が出てきたのかということですが、いくつかの仮説があります。そのうちの一つは貴族階級で嫡子以外の息子たちが、領主やその奥方に媚びつつ地位を安定させようとして詩人となり、騎士・貴族階級の理想像を描こうとしたのではないか、という説です。別の説によれば、カトリック教会は世俗の権力、つまり神聖ローマ皇帝やフランス王との闘争で力を伸ばしますが、特に 11 ～ 12 世紀になると教皇権と世俗権の紛争がだんだんと強くなります。そういうところで、カトリック教会が結婚という制度に非常に様々な拘束を課します。ところが元来奔放な世俗領主や貴族はそれはかなわないと思う、その不満を詩に表現したのではないか、という話も聞かれます。結局はよく分からないわけですが。大体 13 世紀に既にイベリア半島南部やイタリア北部でオクシタン語を用いるトルバドゥールが出現しており、14 世紀に至っても、しばらくはトルバドールの活動が継続します。トルバドールの詩が終わりを迎えたことの説明の一つに、カタリ派の異端を咎めるアルビ十字軍、それに続く異端裁判がトルバドール文化を壊滅させたのではないか、という仮説もあります。しかしこれについては反論もあり、この十字軍以来南仏をフランス語圏が支配するようになりますが、南仏が独立した政治体系を持たなかったことで政治文化的単位として発展する北仏王圏に組み入れられ、トルバドゥールの詩が凋落していくという説もあります。

トルバドール抒情詩における恋愛は fin'amor と呼ばれますが、これは refined love という訳になると思います。金属を精錬して純粋な金をつくる、その「精錬された、純粋な」という意味で、19 世紀の学者ガストン・パリスがこれに「宮廷風恋愛」という名前をつけました。レオ・シュピッツァーはこの fin'amor を「矛盾した愛」と規定し、理想化された女性を性的に所有したいが、所有は恋愛とあい入れるものではなく、ごく俗な愛情関係に堕落するために避けなければならない。この欲望と、欲望を実現してはいけないという矛盾した状況において、

この間隙を生き抜く詩人が理想化された女性に値すべく自分を昇華しようと努める、これが fin'amor の大まかな定義です。恋愛そのものはおそらく普遍的と思われますが、大切なのは詩にしたときに、詩の形態が恋愛をどのように捉えるかということだと言えます。

14 世紀になると抒情詩が音楽と切り離されます。もともと抒情詩は音楽を伴いますが、オクシタニアでは既に凋落しております。北フランスでは 14 世紀のギヨーム・ド・マショーが、詩を作ると同時に作曲もした最後の詩人と言われています。なぜ詩と音楽が切り離されたのかという疑問に対して一つの仮説として、ポリフォニーの展開がよく話題にされます。つまり、ポリフォニーの音楽では言葉自身が聞きとれない、あるいは言葉よりも音楽の展開の方が重要になって、音楽と詩を分けざるを得ないということになります。スペイン、イタリア、そしてドイツ、イギリスに多大な影響を及ぼしたトルバドールの抒情詩は、その後どのような変化を経たでしょうか。例えばイタリアをとると、カヴァルカンティやグィニツェッラ、そしてダンテに至るまでの道筋はどのようなものだったのか。その後ペトラルカが出て、その影響でロンサールなど所謂フランスのプレイヤード派が発展していくというような歴史を捉える必要があるわけです。

fin'amor の特徴として、詩人が愛するのが貴族階級の女性であることが挙げられます。ちなみに農民層の女性はパストレラに現れるのですが、これは騎士がたまたま馬に乗って道を行くと、可愛い羊飼いの娘がいて、彼女に言い寄り、これがうまくいくこともあるし、叩きだされることもあります。しかもこれはドラマティックな対話が中心で、このようなパストレラには農民層の女性が出てきますが、fin'amor ではそうはいきません。ただし女性は必ずしも既婚ではなく、また必ずしも詩人より社会的に上位とも限りません。今否定した女性像は 19 世紀の感受性が作り出したイメージで、この問題についても研究されています。19 世紀にロマン主義が中世を再発見しますが、同時に非常に偏った見方をするようになりました。それを修正するというか、どうやってそこから脱却し、テクストと向き合うことができるかということが、20 世紀から現在に至るまでの宿題と言えます。古来詩の主な分類項として叙事詩、今話題にしている抒情詩、そして劇詩が引かれます。詩で書かれるというのはどういうことかというと、作詞法に則った押韻とか一行の音節数など様々な拘束があるということです。現代では、基本的に抒情詩は一人称での感情の表現として捉えられることが多いですが、これ

は叙述性と対話性をできるだけ抑えることで成立するのではないか、と私自身思っております。ただオクシタニアの詩におけるジャンルは柔軟で、14 世紀半ばの『愛の法則』という文法書で詩人が自分の感情を歌うのが canso だと書かれていますが、この考え方も 14 世紀に至るまでにどんどん変わって、最後にここに到達するというものですから、ジャンル論をあまり推し進めるのも危険だろうと思います。ところで抒情詩の表現主体としての一人称が、他の人に共感されることのない純粋に個人に限定された感情を表現するわけではありません。そうではなく、抒情詩は、普遍的感情とか社会の特定集団の共有感情を個人の名のもとに表現する手段であると言えます。これは非常に重要で、自分しか分からない感情であれば他の人は読まない。感情は個人的でありながら、実は集団に向かって共有できるテーマを提供すると考えるとよいと思います。

南仏には Vidas という詩人たちの伝記があります。Vida とはラテン語の vita、フランス語の vie にあたるオック語で、英語の life にあたる言葉です。これは、13 世紀半ばから 14 世紀にかけて作られたアンソロジーに、普通は作詩の後になってつけられた詩人の短い伝記です。これにはかなり具体的な生誕や死の年、詩人は誰を愛したかといった情報が書かれています。詩人の活動の記述はその作品から想像された物語であることも多く、これについては後ほどジャウフレ・リュデルの例を出します。さらに詩人についての Razo というテクストもあり、これはまた同じように詩のコメントですが、ここでも詩人について語られることがあります。詩というものがどこまで独立できるのか、自己完結性を持つのかについて考えるとき、詩を一篇持ってきて一生懸命読むだけでは十分ではなく、少なくとも社会性との兼ね合いを考えることがテーマになるだろうと思います。これはひょっとすると言語学的な考え方で、文学的ではないのかもしれません。

そこで、一番最初に音楽を聴いていただいた『ひばり』の作者ベルナルト・デ・ヴェンタドルン（図 2）の伝記をみてみます。これは、ひばりが春になって太陽の光に向かって羽ばたいて、暖かさと甘美さが身体に満ちるとわっと落ちていく、非常に強いイメージを持った有名な詩です。『ひばり』の詩人ベルナルトは、ある公爵夫人を愛する騎士のことを考え、彼女に「ひばり」というあだ名をつけました。そして彼女は彼のことを、ひばりがそれに向かって飛んでいく「陽の光」と名づけました。ある日、騎士が公爵夫人を訪れて寝室に入ると、彼女は彼を見て、着ていた上衣の裾を持ち上げて彼の首にかけて、落ちるようにベッド

図２　ベルナルト・デ・ヴェンタドルン

図３　ジャウフレ・リュデル

に横たわった。つまり、ひばりの真似をしたわけです。要するにこの伝記は、書かれた詩から出発して粉飾してお話をつくったものが基本で、つまり生誕の年などは比較的正しいですけれども、話自身はかなり作ったものであるということですね。

次にお話するジャウフレ・リュデル（図３）という詩人は遠方にいる女性に恋をするというテーマを展開し、おそらく先ほどのヴェンタドルンとこのリュデルが最も有名なトルバドゥールではないかと思います。

「五月になって日がのびると」という非常に有名な詩があります。「五月になって日がのびると／遠くの鳥の歌が心地良い、／その場から去った今／遠くの恋を思い出す／欲望に重く頭を垂れ身を屈めて行く、／だから歌もサンザシの花も／凍りきった冬以上には私に喜びを与えない。／私は主を真と思う、／主によって遠くの恋を見るだろう、／しかし私には１つのいいことに、／２つ悪いことが起こる、あの女（ひと）があんなに遠いから／ああ、巡礼者になってあそこにいられたらなあ！／そして私の巡礼杖とコートが／あの女の美しい目に映ったら！」これについても伝記が書かれました。その伝記は次のようになっています。「ブライアのジャウフレは重要な家系の貴族でブライアの王子だった。トリポリ伯夫人についてアンティオキアから戻る巡礼たちが褒めるのを聞いて、見たこともない彼女に恋し、（恋愛詩は目の前にいて美しい、一緒に何かやりましょう、というのはなかなか詩になりにくい。相手に手が届かないということで初めて、恋愛

詩の大きな契機が生まれると思いますが、これは日本や、おそらくイスラム社会でもそういうことが多かったんじゃないかと思います）単純なわかりやすい言葉と美しい音楽で彼女についての沢山の詩を作った。そして彼女に会いたさに十字軍に参加して海を渡ろうとするが、船中で病気になり瀕死の状態でトリポリの宿に運ばれた。伯爵夫人がそのことを知らされてリュデルのベッドに来て、彼を抱いた。リュデルはそれが伯爵夫人だと知り、すぐに聴覚と嗅覚を取り戻し、彼女を見るまで命を支えて下さった神をたたえ、そして彼女の腕の中で死んだ。伯爵夫人は神殿騎士団の修道院に名誉を持って（リュデルを）墓に入れ、彼の死で受けた辛さからその日のうちに修道女になった。」これは先ほど読んだ詩から出発した、明らかな作り話ですが、リュデルは十字軍に実際に参加したと言われています。二つの伝記の例を出しただけですが、これを基に詩の活用というテーマに移りたいと思います。

トルバドゥールに雇われたり宮廷で演じたりするジョグラール（joglar）という大道芸人は中には、トルバドゥールの作った音楽の伴う詩を即興で歌う者がいます。そのパフォーマンスでは歌の前に詩人を紹介することができ、つまり「私はこれからこの人の書いた詩を歌います」、「この人はこういう人です」と前置きをする役目もあります。リュデルが書いたとはっきり分かっている詩は八篇ありますが、リュデルは伝記が詩そのものよりもよく知られることになります。それは後世に様々な形で活用されたからだと言われ、例えばハイネの Geoffroy Rudèl und Melisande von Tripoli ではロマン主義的感性がよく表されていると思います。これは、またロバート・ブラウニングが英訳しています。他にも多くの詩人がリュデルの伝記を様々な作品に活用するというように、少なくとも文学の世界で活用することが十分にあります。これは考えてみれば当たり前のことで、結局この伝記 Vida はインターテクスチュアリティの権化みたいなものですから、結局あるテクストから何か話を作り、その作られた話を見て今度は詩に戻るなど、そうした行き来があるわけです。大道芸人はジョグラール（英語で juggler）ですが、次の図はリモージュのサン・マルスィアルでつくられた写本の中に出てくるものです。（図 4）

詩は短いテクストのスタイル、これを brief genre とでも呼ぼうと考えていますが、日本語で訳すと「簡潔ジャンル」のようになるのでしょうか。これは広告や役所のお知らせなど、基本的に短い言葉で綴られるテクストで、芝居のト書き

図４　ジョグラール

や小説の裏表紙にある著者紹介、一口噺など様々な種類が身近に見いだせます。短さというのはもちろん相対的概念で、やはりどうしても主観的な部分が入ってきてしまうと思いますが、いずれにせよ和歌も俳句もそしてそしてオクシタニア抒情詩も brief genre の類ではないかと思います。短いテクストの基本はテクスト解釈が文字以外の外部の情報に依る、つまりテクストだけでは読み切れないもしくは不十分に感じるため、他の情報による支えが望まれるという性質があると思います。その外部からの情報とは、テクストの位置する時空間、状況、発信者と受信者の関係、どういう人であるのかなどです。他にもテクストから感じる言外の意味であるとか、無言の情報、印象、そして韻律に基づく詩であるということなどがありますね。韻律に基づく詩はその形態が既にジャンルを予想させますし、もしくはアンソロジーであれば読む前からこういうものが書かれているだろうと予測ができるわけで、つまりテクストそのものだけではなく、テクストがどういうところに挿入されているのかということです。伝記はストーリーを設定することで、詩に一つの解釈を提示、つまり解釈の可能性を提示すると言えばいいでしょうか。他方、伝記の言説はそれ自身がインターテクストを構築し、新たな解釈空間を設定するに至ります。これはリュデルの伝記がハイネに至ったことにも言えると思います。またオクシタニアに生まれた恋愛観は色々と変容を遂げながら現代に至るまで存続し、これには様々な変形があります。例えばトリスタン伝説の媚薬、薬を飲んで恋に落ちるというのは、これは元来の fin'amor ではあ

りません。fin'amor というのは詩人が自分の意図をもって女性を選んで、その女性に値するように自分を研鑽する、洗練していくという構造ですが、「トリスタン」はまさにそれと正反対の方向にいっているわけです。ですから、ベルールの伝える古いほうのトリスタン伝説には媚薬が恋人たちの恋愛を引きおこすのですが、トマの書いた宮廷恋愛風バージョンでは媚薬は恋愛の物理的原因ではありません。

終わりになりますが、オクシタニアの中世抒情詩はヨーロッパの恋愛観の枠組みを提供し、これが文学のみでなく文化の一部として存続しました。他方テクストの韻律や修辞的レヴェルでの彫琢の度合いを別にして考えると、抒情詩を離れた、政治や宗教的内容を持つ詩も音楽を伴うことで聴くものに感動を与えることもあるだろうと思います。

図版出典

図１

https://www.lexilogos.com/oc_langues.htm（2020 年 3 月 5 日アクセス）

図２

https://en.wikipedia.org/wiki/Bernart_de_Ventadorn#/media/File:BnF_ms._12473_fol._15v_-_Bernart_de_Ventadour_(1).jpg（2020 年 3 月 5 日アクセス）

図３

https://fr.wikipedia.org/wiki/Jaufré_Rudel#/media/Fichier:BnF_ms._12473_fol._102v_-_Jaufré_Rudel_(2).jpg%E2%80%BA（2020 年 3 月 5 日アクセス）

図４

https://www.limousin-medieval.com/tropaire-de-saint-martial（2020 年 3 月 5 日アクセス）